風の御主前（うしゅまい）

小説・岩崎卓爾伝

大城立裕

大城立裕

風の御主前（うしゅまい）

小説・岩崎卓爾伝

大城立裕（おおしろ・たつひろ）

1925(大正14)年　沖縄県中頭郡中城村で生まれる。
1967(昭和42)年　第57回芥川賞を『カクテル・パーティ』で受賞。沖縄初の芥川賞作家となる。『小説・琉球処分』『現地からの報告・沖縄』『ばなりぬすま幻想』『恩讐の日本』など著書多数。
現　在　沖縄県立沖縄史料編集所長。

検印廃止

風の御主前（うしゅまい）——小説・岩崎卓爾伝

昭和四十九年三月五日　第一刷
昭和五十年一月十日　第四刷

著者　大城立裕
発行者　浅沼博
印刷　製本　凸版印刷株式会社
発行所　日本放送出版協会
郵便番号一五〇
東京都渋谷区宇田川町四一一

（落丁本・乱丁本はお取替いたします）

©1974 Tatsuhiro Ōshiro

目次

若夏の新妻　五
処女地　三五
貴志子　六九
日本人よ！　一二
故郷のうちそと　一三九
ぶすふか牽牛　一九七
片眼の巌窟王　二三七
初東風（こち）す　二六一
あとがき　三三五

装幀　米谷誠一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

風の御主前（うしゅまい）——小説・岩崎卓爾伝

若夏の新妻

岩崎卓爾は、木綿の絣と袴につつんだ痩軀に信玄袋ひとつをかついで、石垣港に降りたった。石垣港といっても、この明治三十年代、桟橋はまだない。蒸気船は沖に碇泊して、客は帆をかけた馬艦船（まーらん）にのりかえて岸へつく。馬艦船をおりると、眼と鼻のさきに民家がある。萱ぶきの軒が低く窓もすくない、見るからに貧相な造りである。

（なるほど、台風に耐えるための造りだな……）

と、いちはやくひとつ観察しておいて、道ゆく一人をつかまえた。中年の百姓である。

「測候所はどこですか？」

「はあ？」

相手は訊き返した。

「測候所はどこですか？」

卓爾は再び問う。耳が遠いのかと思って、すこし声を大きくした。
男は、当惑そうな眼つきで卓爾をしばらく見ていたが、わきを漁師らしい男が通りかかったとき、それをよびとめて、ひとしきり二人で何かしゃべりあった。その様子で卓爾は、言葉が通じなかったのだと覚った。
「これだ！」
卓爾は信玄袋を地面におくと、両手をつかって家のかたちをつくり、四方の壁に段々がついているかたちを、両手でつくった。いそがしい手真似だが、つまり測候所にあるはずの「百葉箱」を表現したつもりである。それだけで相手が眼をまるくして考えこんでいると、こんどは両手を頭の上にのばして空を小さくひっかきまわすしぐさをした。
「ああ、テンブンヤ……」
と、あとから来た漁師がまず叫び、はじめの百姓も、大きくうなずき、
「うん、テンブンヤ……」
と言った。
「そう。その天文屋だ」
卓爾の勘にふれるものがあって、はじめて聞く言葉に相槌をうった。
百姓は卓爾に合図をして歩きだした。口で説明するより足で案内したほうがらくだ、ということであるらしかった。
船着場から遠くはないところに測候所はあった。白い百葉箱が露場に立っていて、風力計が

よくまわっている。
卓爾がわずかの鳥目を百姓にあたえると、百姓はびっくりしたあとおしいただき、それから卓爾へ、
「ヤマト？」
と問うた。
卓爾は、訳が分からないながらも、微笑でうなずいた。

「迎えにも出ず、失礼」
石田所長は卓爾に詫びた。気難しそうだが、卓爾の着任がうれしいとみえて、笑った。
「電報を打ってないのですから、やむをえません」
卓爾は言った。船便が月に一度ぐらいしかなく、不定期だから、そうならざるをえない。
「明治三十一年十月十六日　雇岩崎卓爾本所在勤を被命」
と、八重山地方気象台年表にある。「本所」とは、「中央気象台附属石垣島測候所」のことである。
石田所長は、卓爾を所員にひきあわせた。所員といっても、所長を除けば観測員として与儀実裕と上江洲由矩という、いずれも二十歳代の青年と、初老の小使が一人いるだけである。
「どの君も現地雇でね……」
石田は、所員を仕事へもどすと、低い声で言った。「訓練をへていないから骨が折れる」

「鍛え甲斐がありますな」
卓爾は、言ってから照れた。仕事への意気ごみが先に出すぎた、という感じである。
「わざわざ当地勤務を希望されたということだが……？」
石田は、念をいれるような訊きかたをした。初老だが、まだ定年退職という年齢ではない。測候所を明治二十九年十一月に開設していらい、二年間所長としてつとめてきたが、転勤を希望し、卓爾は交替のために赴任した。
「その通りです」
「北海道にもおられたのだな？」
「札幌と根室で、あしかけ六年です」
「北海道もまだ未開地だろうが、当地はなおひどいものですぞ」
「気象業務は自然が相手ですから、文明とあまり関係がありません」
「まあ、あんたがそれほど言うなら、ちょうどいいところだろう」
石田は、機嫌をそこねた様子を見せた。すこし言いすぎたかな、と卓爾は反省した。が、すぐにまた、どうせこの老先輩と自分とは考えかたが合わないのだから、それでよいのだ、と思いなおした。
「しかし、あらためて御苦労さまでした」
卓爾は頭をさげた。これは正直な気持ちである。日本じゅうでもまだ知る人の少ない石垣島という僻地に測候所を創設したときは、「個人住宅二十七坪を一か月三円五十銭で借りた」と

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

報告されている。

「十一月二十日　観測員として技手石田三之、雇上江洲由矩弐名先発在勤として着任」

「十一月二十五日　晴雨計、乾湿計、最高低寒暖計、雨量計にて不完全ながら気象業務開始」

とある。こういう努力を、石田初代所長はやってきた。

それから半年後の明治三十年四月に、登野城村糸数原に「新庁舎落成」とあるが、この新庁舎とても「木造瓦葺五十三・五坪」にすぎない。それだけに職員の苦労が察しられる。

卓爾は、庭下駄をはいて庭におりた。

新築の赤瓦の屋根と、屋敷の周辺に茂っている木々の緑とが照り映えて美しい。しかも秋のさなかである。

「富士山頂に、しばらくいたことがあるのです……」

と、卓爾は思いだして言った。

「富士山頂はまた大変だろう」

と、石田は相槌をうった。このころ、富士山頂気象観測所というものは、まだ本格的な設置にいたっていない。臨時のテスト観測のようなもので、その苦労はやはり専門家として想像できた。

「年じゅう台風が吹いているようなものですからね」

「きみ、台風観測を期待してきたのですか？」

石田も庭へ降りてきた。

「もちろんです。若いうちにと思いまして」
「そう。若いうちならよい。それも独身のうちがよい」
「どうしてですか？」
「私はね、岩崎君……」
石田は、露場にはいって行って、百葉箱の前に佇った。「観測所の設備のためにも苦労したが、この仕事をこの土地に定着させることのほうが、なお難しい」
「定着？」
「そう。気象観測業務なるものが何であるか、土地の人が理解してくれないのだ」
「では予報も……？」
「予報を信じる信じないというより前に、まずこの設備を奇怪に思うらしい。この箱のなかに怪物でもはいっているのかと……」
「キリシタン……？」
卓爾は、自分で思いつきながら笑う。
「そう。この島にもむかしキリシタン疑獄があったらしいがね。そこまで想像をめぐらさずとも、まず第一に、私がヤマトから来たということ」
「ヤマト？」
海岸から案内してきた男の言葉を思いだした。
「内地ということだ。むかし薩摩にいじめられた歴史をもっているから、ヤマトの人間を信用

しない伝統がある」
「そのなかで気象業務を啓蒙していくのは大変だということですね」
「私はなかば諦めかけている」
それで石田所長は逃げだすのか、と卓爾は思った。しかし、俺はがんばるぞ——若い意欲がそう思った。
空に鷹が輪を描いた。これがこの地方に特有なサシバという渡り鳥で、季節を知らせる美しい風物だということなどを、卓爾は追い追い知るようになる。
「富士山頂もよいが、やっぱりここが、日本一の空だなあ」
卓爾は、空を仰いでどなった。ひどいずうずう弁である。
ちょうど庭に出てきた上江洲が、くすっと笑った。
「おかしいか。俺の発音はおかしいかも知れぬが、言ってることはちっともおかしくないぞ。どうだ、そうだろうが」
上江洲は、なんとなく釣られて空を見上げた。
「俺は、この空にあこがれてきたのだ」
上江洲は、空から岩崎の顔に視線を移した。空などよりこの新参者のほうが、よほど珍しい。
その新参の岩崎が、十二月五日には「所長心得」を命じられた。石田所長は十一月に転出したのである。

岩崎卓爾は、所長心得の辞令をうけてから二、三日たったころ、それが癖の、ひょいひょいと腰をおよがせるような足どりで外出から帰ってくると、

「おい、保久利……」

と、初老の小使をよんだ。「いい言葉だなあ、おい」

「何がですか？」

この所長は、だしぬけに物を言うことが好きなひとらしい、と保久利が用心するのへ、

「天文屋というのだ。測候所のことだ」

「ああ。それなら、みんなで言っています。珍しいですか」

「島司のところへ就任挨拶に行ったらな。島司にちょうど客があった。どういう人か名前は知らぬ。人品いやしからぬ老人だ。その仁が俺の挨拶を聞いて、傍から言った。ほほう、天文屋の御主前になりなさったか、めでたい、とな。前にも一度だけ聞いたことがあるが、なんともいい言葉だ」

「そんなによい言葉ですか」

観測員までが、仕事の手をやすめて聞く。

「よい言葉ではないか。だいたい、気象観測というものはな。土地の人は機械に眼がくらんで、はじめてつきあうような顔をしているが、ほんとうはどの土地でも昔から素朴な手段ながらやっているのだ。その伝統のひびきというものが、天文屋という言葉にはこめられている。しかも、その御主前ときた。これが愉快なのだ」

「御主前とは、もともとはおじいさんのことです」
と、上江洲が言った。
「おじいさん？」
岩崎は、素頓狂な声で、「いよいよ愉快ではないか。まだ独身の俺が、おじいさんとは」
ひとりで悦にいるのを、職員たちはまぶしい感じで見つめる。三人がかりで敵わない感じなのだ。ヤマトから来た偉い人だから若くても御主前とよんでいる、そのことをあらためて説明する必要はなさそうである。
「所長は、結婚なさらないのですか」
と、保久利が思いきって問うた。三か月ほどたってからのことである。三十歳といえば、男といえども独身というのは珍しい時代で、初老の保久利がはじめて親しみをこめた質問であった。
すると、岩崎は意外な応じかたをした。
「フクリー。高砂の掛軸をどこからか借りてこい。鴛鴦でもよい」
「はあ？」
保久利には、「高砂」は通じないが、「鴛鴦」は通じた。通じたとたんに、「高砂」のほうも勘で分かった。分かったけれども、それでなお合点がいきにくくなった。
「誰か結婚式ですか？」
「俺がさ」

「いつ？」
「明日」

石垣島の冬は去った。
南の海を春風が渡ってくる季節である。この季節を八重山では、
「うるずん」
という。沖縄本島ではむかし「うりずん」と言ったらしく、『おもろさうし』という古謡集にはそう書いてあるが、八重山では「うるずん」と言っている。またのよび名を、
「若夏」
ともいう。
湿う季節、夏にむかって伸びていこうとする若さの季節。
「うるずんになったら、埋めた馬の骨が動きだす」
という俚言が、八重山にある。新鮮な草を食むために動きだす、というのだ。
「俺も、俺の草を求めて動きだした」
と、岩崎卓爾が言った。
おどろいたのは、保久利だけではない。二人しかいない部下職員が、そろっておどろいた。所長が結婚式をあげるというのだ。冗談だとすれば、誘いだした保久利に罪がある。しかし、それだけでおどろいたのではない。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com